
THE IDOLM@STER memorial stars

とじひも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE IDOLM@STER memorial stars

【Nコード】

N0271Z

【作者名】

とじひも

【あらすじ】

765プロ所属のプロデューサーの彼には、過去の記憶がない。アイドルたちと過ごした日々、思い出 そういった全てを思い出すことは、もうない。

それでも彼は、アイドルプロデューサーをやめない。

絶対、トップアイドルにしてみせる。

それが、彼に唯一残った、アイドルたちとの約束だから。これは、記憶を失ったプロデューサーと、そのアイドルたちとの、少し歪な物語。

プロローグ

冬の寒さがしんしんと肌にしみるようになってくると、事務所の老朽具合もまたありありと体感できるようになる。

築何年とも知れないオンボロ建造物。隙間という隙間から外気が忍び込んできている気がする。彼は小さく体を震わせて、作業に邪魔な益体のない考えを吹き飛ばした。

彼が書類の細かな文字たちとの格闘を再会しようとする、頭上から声がかかる。

「遅くまでお疲れ様です、プロデューサーさん」

事務員の小鳥がいつものようにお茶を入れてきてくれたようだ。熱々と立ち上る湯気の向こうに小鳥の柔和な笑顔がのぞいている。

「すみません、いただきます」

「まだお時間はかかりそうですか？」

「ああ、いえ……」

ふと気付いたように彼は時計を確認した。それなりに遅い時刻を針が示している。

「これは別に急ぎの要件ってわけでもないですよ」

「そうなんですか？」

「はい。ただ、ちょっとこの後約束がありました……」

「……ああ。そういうことですか」

全てお見通し、とばかりに小鳥はいたずらっぽく笑みを浮かべる。

「ええ！？　今のでなんだかわかるんですか？」
「わかりますよ。だって今日は……」

ガチャツ、と勢いよく開かれた扉の音で、その先はかき消された。

「プロデューサーさん！　遅くなりました！」

一人の女の子が飛び込むように事務所に入ってくる。彼女のトレードマークである赤いリボンは角度が微妙にずれ、髪のアちこちが乱れている。せえせえ、と息を荒くして、しばらくの間その場で呼吸を整える様子を見ると、どうやら相当に急いで帰ってきたことがうかがえる。

そんなに楽しみにしていたのだろうか。

「あわてなくても逃げやしないぞ、春香」

「で、でも、お待たせするのは申し訳ないじゃないですか！」

天海春香。彼のプロデューサーする　765プロのアイドルの一人だ。

しん、と静かだった事務所の雰囲気も、彼女がいるだけでなんとなく明るくにぎやかなものになった気がした。その場に華が咲いたような気分らせてくれるのは、やはりアイドルであるだけのことはある、と思うのは、いささか身内びいきが過ぎるのだろうか。

「あの、私の顔になにかついてますか？」

「……いや。頭、ぐしゃぐしゃになってるぞ」

「ええ！？　本当ですか！？」

「はいはい、春香ちゃん、ちょっと動かないでね」

「あ、あ、すいません！」

小鳥がすつと近寄って、春香の髪型を整えていく。その間に彼は、ざっと仕事机の上を片付けて、出かける準備をする。

「……よし」

なんとなく、ぎゅっとネクタイを締めなおして、彼はことさらに大きな声を上げてたずねる。

「春香、今日は何が食べたい？ ある程度までなら値の張ったおねだりを

聞いてやれるぞ。給料日後だからな」

言った瞬間、春香の目がぱつと輝くのが見えた。

「わーい、やった！ じゃあ、えっと……うーん、ステーキ、とか？ いやいや、焼肉？ あ、フレンチもいいなあ……」

「……ある程度まで、な」

くすつ、と含み笑いをこぼしながら、困ったような顔を向けてくる小鳥を、彼はあいまいな表情で見返した。

「もうすっかり冬ですね、プロデューサーさん」

はあ、と吐息が白いのを確認して、春香は言った。

「ああ……そろそろデスクワークがづらくなってきた」

「ははは……事務所もいい加減新しくできたらいいんですけどねえ」

「お前たちが頑張ってくれたら、それもまた夢じゃないんだが……」

「う……頑張ります」

決して売れっ子とは言えない身としては、痛いところがあったのか、申し訳なさそうな声が返ってくる。慌てて冗談だよ、と笑ってやった。

「春香たちは全力でやってくれてるさ。あとは俺が何とかしなきゃな」

「そ、そんなことないですよ！ プロデューサーさんだっていつも全力で助けてくれるじゃないですか！」

「……ってことは、もうこれ以上春香が売れることはないってことか？」

「え？ あ、あれ……？」

眉間にしわを寄せて真剣に悩み始める春香の様子を見て、思わず吹き出す。

「からかわないで下さいっ！」

悪い悪い、と適当に返事をしながら、彼は胸の中が安堵で満たされていることに気づく。

そう、実を言うと不安だったのだ。こんな風に、アイドルと二人きりになってしまうこと。彼のことを、彼以上に知っている人物と、うまく話をあわせられるのかどうか。

「杞憂か……」

「……え？」

「なんでもない」

そう、杞憂だ。

引け目を感じすぎているのだ、と思う。だから逆に神経質になっ

てしまっている。過去の自分に。過去の自分を知っているアイドルたちに。

自分は自分だ。どこまで行っても自分でしかない。普通にしていればいいのだ。それで、日常は変わらずに進む。

言い聞かせるように繰り返すことさえ、それを無視できていない証左である。だが、彼はそのことに気付いていなかった。

「なあ、それはそうと、どうして突然ごちそうして欲しいなんて言ってきたんだ？ なにかあったのか？」

「…………え？」

ぎぎっ、と歯車の食い違った音を聞いた。

「プロデューサーさん、わかってなかったんですか…………？」

「春香…………？」

「だって、今日は、大切な…………」

まるですがりつくように、まっすぐ瞳をあわせてくる春香をまともに見つめることができずに、彼はおそろのおそろの口にする。

「悪い…………今日は、何かの日だったのか？」

「…………っ」

やってしまった、ということとはわかった。

「お、おい、春香!？」

静止の声はとどかなかった。伸ばした手は振り払われた。

まるで、今の自分が否定されてしまったみたいに。

「……あーあ」

ため息までもが、忌々しいくらいに夜の暗闇に白く輝く。
ウソでもいいから、とりつくろうようなセリフを告げればよかつたのだろうか。

彼女の期待に、応えてあげべきだったのだろうか。

そもそも、なぜ期待されなければならないのだろうか。

彼女たちにだってわかってるはずなのに。

「大切な、って言われても、わからないよな……」

わかるはずがない。

彼女にとって自明の事実でも、彼にとってはそうではない。

たとえそれが、彼女と彼との記憶であっても。

「だって、俺には……もうない記憶なんだからさ」

これは、記憶を失ったプロデューサーと、そのアイドルたちの、少し歪な物語

1 自問

765プロ所属のプロデューサーの彼には、過去の記憶がない。どうしてそうなってしまったのかも、彼にはよく分からない。

もちろん、知識として前後関係を把握していないわけではない。彼は交通事故に遭ったのだ。仕事場にアイドルを送迎する途中の出来事だったらしい。

だけど、どうして自分がアイドルプロデューサーをやっていたのかわからない。

どうして自分が今も アイドルプロデューサーを続けているのかわからない。

強いて言うのなら、彼に唯一残った記憶がそうさせているのかもしれない。

絶対、トップアイドルにして下さいね

そうと約束を結んだ相手も、彼にはもう思い出せない

パソコンの画面から目を離して、事務所を見わたす。

相変わらず手狭な空間が広がっている。視界の隅では小鳥が同様に事務作業にいそしんでいる。まだアイドルたちは誰も来ていないようだった。

ふと、小鳥と目が逢う。

「……お茶、入れましょうか？」

「あ、大丈夫です」

「そうですか？」

小鳥は無言で作業に戻る。

彼女は彼よりも年上の同僚である。温和で気さくな性格。口元のほくろがチャームポイントだ。

たしかに美人だが、さすがにアイドル、という年齢ではない（本人に言ったらうらめしそうな目で見つめられるだろうが）。彼と同じく、アイドルをサポートする側の立場である。

今でも覚えている。初めて　今の彼の感覚として初めて、この765プロに足を踏み入れたときのことだ。

迎えてくれたのは、小鳥だった。

おかえりなさい、プロデューサー。

小鳥は、あれこれと彼に尋ねることはしなかった。必死で状況をつかもうとする彼の邪魔をしないように。手助けになる助言だけをしてくれた。

それは今だってそうだ。

内心で怯えているのを、知ってか知らずか、あくまで自然な態度で接してくれる。

彼には、それが何よりもありがたい。

「……年功ってやつだよな、やっぱり」

「む？　なぜか今侮辱された気がしました!」

「き、気のせいですよ」

地雷に足を乗せてしまったときのような一触即発の空気を、勢いよく開いた扉の音が吹き飛ばす。

「おっはよー!」

「じっさいですよー!」

見た目には瓜二つの少女が並んでいた。

世にも珍しい一卵性双生児アイドル 双海真美、亜美姉妹である。

見分ける方法は髪の結び方しかない。長めのサイドポニーなのが真美、サイドテールなのが亜美である。

「真美ちゃん亜美ちゃん、おはよう。学校はどうしたの?」

「今日は創立記念日っしょ!」

「あら、そうだったの」

「そうだよー! だからね、」

ぐるり、と向き直って、

「にーちゃんと遊びに来ました!」!」

そうやって声を一つにする。

「……仕事に來い、仕事に」

「えー? つまんない」

「ちよーテンション下がるー」

「そう言われてもな……」

ぶーぶーと不満を訴えられる。反撃まで二倍になって返ってくるのが双子の厄介なところだ。

「にーちゃん?」

「もしかしてなんか、元気ない?」

「……え?」

突然。

まったく意識していなかったところをつかれてドキリとする。

「昨日なんかあった？」

「落ち込んだりしてない？」

「な、なに言ってるんだお前たち。べつに普通だよ」

一転、双子の表情はこちらを安堵する顔になっている。

妙なところで勘が鋭い。別れ際の春香の顔が思わず浮かんでしまったことも、彼女たちは見逃さなかった。

「もしかしてまた、気にしてんの？」

「にーちゃんはにーちゃんなんだから、普通にしていればいいんだよ」
「！」

ずい、と身を乗り出して、一回り以上も年下の少女に説教をされる自分。情けなく思うと同時に、笑えてくる。

普通にしているつもりなのだ、自分では。

「記憶放出なんて、大したことないよ」

「亜美たちみんなにーちゃんのこと支えるからね！」

「……記憶喪失、な」

ぼんぼん、と頭を軽く叩いて、レッスンに向かうように指示する。

双子は眉じりを下げたまま、それでも素直に言うことを聞いた。

「小鳥さん、やっぱりお茶、もらえます？」

「……ええ、いいですよ」

誰も聞く者のいなくなったところで、深いため息をつく。

「アイドルに支えられてどうする……」

変に気を使われるより、双子のように遠慮なく踏み込んでこられるほうが、気は楽になる。

支えられているのはたしかに事実かもしれない。

それは本来彼の仕事なのに。

これではプロデューサー失格だ。

「続ける意味あるのかな……この仕事」

半ば意地になって戻ってきたプロデューサーという職業。

まるで記憶を失う前の自分に少しでも近づこうとするかのように。

『だって、今日は、大切な……』

アイドルにあんな表情をさせてしまう彼に、プロデューサーである資格はあるのだろうか。

自問するが、答えは出ない。

2 オレンジ

午後になると、だんだんアイドルたちのやってくる時間になる。彼はあいさつもそこそこに、外の自動販売機の前に足を進めた。やがて彼女と 春香と顔を合わせるときが来る。もちろん悪いのは彼だ。謝らなければならない。さすがにみんなの前で頭を下げるのは遠慮したいところ。詮索するなというほうが無理な話だ。

「……お」

ちょうどポケットの中に小銭を入っているのを見つけ、そのまま投入する。

ランプが点灯。コーヒー、紅茶、果汁飲料、どれにしようか……、

「えい」

「あ……」

横から伸びた手が、逡巡する彼を差し置いて素早くボタンを押し込む。

がしゃこん、と缶が吐き出される音。銘柄を確認するより先に、彼は振り向いた。

「律子か」

「おはようございます、プロデューサー」

秋月律子。レディーススーツを今日もびしっと着こなす姿は、ベテランのOLよりも決まっている気がする。まだ成人もしていないはずなのだが。

元アイドル、現プロデューサーという変り種である。常にアイドル目線を保つことができる律子には、見習わなくてはならないと感じることも多々ある。

「まだ選んだのに」

「でもプロデューサーの好きなもの選んでおきましたよ、ほら」

律子を取り出したのは、100パーセントオレンジジュース。

「好きでしたよね、これ」

「ん、ああ……」

あいまいな返事しか返すことができない。

「もしかして覚えてませんでした？ これ、好きなこと」

「いや……」

受け取ってプルタブに力を入れる。爪を切ったばかりで数秒手こずることになった。

「悲しいですね。自分が何を好きだったかも忘れてしまっなんて…

…」

目を落として、律子は小さくごめんなさい、とつぶやいた。

悲しい。

その言葉どおり、律子は何かを心から悲しんでいるように見えた。まるで、自分自身のことのように。

「そんなことないよ。別にオレンジジュースの味まで忘れたわけじゃないからな」

一気に口に入れる。

記憶にある通りの酸味と甘味が口の中に広がる。

生活に必要な知識や常識が、丸ごと抜け落ちてしまったわけではない。もしそうであつたら、彼は今のんきにプロデューサー業など続けて入れなかつただろう。

抜け落ちてしまったのは、体験とそれに伴う感情。

オレンジジュースの味は覚えていても、それを飲んでどう思ったのかは、彼は覚えていないのだ。

だが、そうだとしても、

「……な。もう一度飲めば、すぐ好きになれるさ」

本当のところ、彼の味覚は甘すぎるその飲料をあまり歓迎してはいないようだったが、彼はそう言って笑って見せた。

「なんだ。プロデューサーっていつもブラックのコーヒーしか飲まなかつたのに、そういうのも好きだつたんですね」

「おい！」

格好つけたのはなんだったのか。

神妙な雰囲気とは一転。

けらけらと楽しそうにしている律子を見ているとそれ以上怒る気にもならない。彼はもてあましたジュースの残りを律子の手に押し付けた。

「責任とって飲んでくれよ」

「……え？ いいんですか？」

「悪いけど、あんまり好きじゃない」

「で、でもこれって……」

もう一度硬貨を投入。かつての自分にならってブラックコーヒーを買う。

「どうした？ 飲まないのか」

「……え、はい」

律子は数秒の間、親の敵のようにオレンジの断面図をにらみつけ、それから思い切って口をつけた。

ごくごくごく、とすごい勢いで嚥下していく。どうも全然味わっていないような気がしたが、喉ごしを優先するのが彼女の飲み方なのかもしれないので、彼は特に何も言わなかった。

「ふう、ふう……無駄に疲れたじゃないですか」

「……？」

水分補給になにか疲れることがあるのだろうか。

「もういいです……バカ」

きつ、と上気した頬をあらわに、律子は最後にきつい一瞥をくれる。

足早に立ち去っていくスーツの後姿を見ながら、彼は彼にとってまったく不可思議なこの顛末について、深く思考をめぐらせ始めた。

手の中で、コーヒーは冷めていく。

3 矛盾

かんかんかん、と階段でリズムを刻む音が聞こえる。
時々つまずくように調子が外れるその足音……なんとなく、春香のような気がした。

「……あ」

真ん丸の瞳と視線がぶつかる。
春香だった。

「その、春香、俺……」

その先が、うまく口をついて出ない。
謝るといって、なにを謝るんだ？
忘れてしまったことがなんなのか、わからないくせに。

「昨日はごめんなさい！」
「……え？」

視界の中で、赤のリボンが大きく振れる。
目の前で春香が深く深くまで、頭を下げていた。

「私、自分のことしか考えてなくて……ホント勝手なことしちゃって……」

「そんな、」

そうじゃない。

そうじゃないんだ。

「……なに言ってるんだよ。悪かったのは俺だろ」

「プロデューサーさんは何も悪くないですよ。私が、勝手に……」
「そうじゃないだろ……」

なんで謝るんだ。

忘れてしまったのは俺じゃないか。

俺が、なにか大事な思い出を踏みにじってしまったんだ。
怒って当然じゃないか。

「一番つらいのはプロデューサーさんなのに……ダメですね私って」
「……っ」

胸を強く殴りつけられたような、鈍い痛み。
息が苦しくなる。

「……やめろよ」

「え……?」

「……悪い。ちょっと外の空気吸ってくる」

逃げる。逃げているだけだ、これは。

踵を返して、一直線に歩き出す。

「プロデューサー……?」

なんなんだ。

どうしてこんなに、むかついているのか。

「くそっ!」

荒れた呼吸が、喉の奥を刺激する。
いがいがとした痛み。もどかしく狂おしい感覚。

「くそ……っ！」

わからない。なにがそんなに傷つける。

『一番つらいのはプロデューサーなのに……ダメですね、私って』

そう告げた春香の顔を思い出せる。

泣きそうにきしんだ、いびつな笑顔。

諦めと寂しさを奥に秘めた、仮面の表情。

「やめるよ……そんな顔……」

過去を失くした自分に、気を使われなくなかった。
過去を失くした自分に、期待して欲しくなかった。

なのに。

それなのに。

見捨てられなくなかった。

諦めて欲しくなかった。

彼を、許して欲しくなかった。

「自分勝手なのは……俺だよ……」

どうしようもない矛盾。

過去の自分にできたことを求められるのが怖くて。

過去の自分を忘れられてしまつのが怖くて。
恐ろしかったのだ。

……自分という存在が、わからなくなる。

雑踏の中に紛れながら、彼は底から湧き上がる恐怖に身を震わせた。

彼はいま、どこにいるのだろうか。

有象無象の人の群れ。分解しても一ビットに満たない彼の存在。

叫びたかった。

気付いて欲しかった。

誰かに、彼が、ここにいることを。

「おい、あんた大丈夫か……？」

「え……？」

振り向く。

こちらを見据える、落ち着いた瞳がそこにあった。

「……あんた、おっさんだよな？」

「……お、おっさん！？」

一瞬なにを言われたのかわからなかった。

それは目の前の青年に比べたら、彼は年をいってしまっているのかもしれないが、おっさんなどと呼ばれる範囲にさしかかっている覚えはない。

「だ、誰だ、君？ 人をいきなりおっさん呼ばわりとは……」

「はあ！？ この俺の顔を、忘れたってのか！」

……顔って言われても。

よく見ると、その青年は整った顔立ちをしていた。意志の強そうな目。シャープな輪郭。すらっとした体躯。そう、まるでアイドルのような……、

「あ、もしかして……」

「そうだよ！ 天ヶ瀬冬馬だ！ いずれお前らのところのアイドルを打ち負かすこの俺様を忘れてんじゃねえ！」

アイドル。

この青年も、またアイドル。

「どつだ、思い出しただろ。まったく、一度引いてやったからって油断しやがって……」

「いや、ごめんまったく」

「なんでだよ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0271z/>

THE IDOLM@STER memorial stars

2011年12月14日00時52分発行